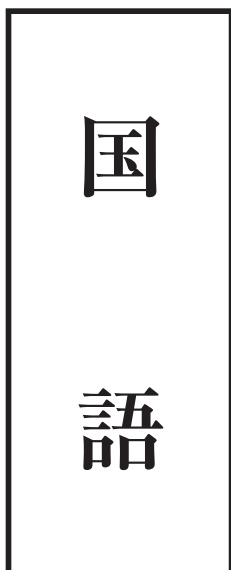


二〇二二年度

入学試験問題



注意

- ・指示があるまで開いてはいけません。
- ・答えは解答用紙に書きなさい。
- ・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
- ・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。
- ・句読点や「」などの記号も一字とします。
- ・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。
- ・答案用紙上の消しゴムの消しカスは、しっかりはらっておきなさい。

一 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) とんだイサみ足だった (2) エンムスびの神社
(4) エヒメ県のみかん (5) 本のラクチヨウを見つめる (6) (3) 五輪の開会式でキシユを務める
フワ雷同

二 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

五十五点のあこがれ

井場 千穂

あこがれの中に 私がいる

輝く光の中に 私がいる

① なんてすごいのだろう

みんなが ②

そのすごさは 何か知らぬままに

そのすごさは みんな知らぬままに

そんな平凡な空想の中で 聞えてくるのは……

「井場、五十五点！」

悲鳴に近い奇声を発しながら

すつ飛んでもらった一枚の紙きれを

小さく小さく折りたたむ

おとなりさんは……？

ああ……また百点だ……

あいた窓には 小粒の雨

たいしてみじめでもなければ

冗談を言う気にもなれない

あこがれの中に私がいる

そして私は その私に

思いつき顔がまかせて

◎ アツカンベーをした

ぼんやりと見ていた空に
やがて太陽が顔をのぞかせた

(吉野弘『詩の楽しみ―作詩教室』岩波ジュニア新書)

(1) ——— ㉠ 「なんてすごいだろう」とありますが、このときの〈私〉の心情を説明しているものはどれですか。

- ア みんなから褒められていい気になっている。
- イ おとなりに張り合う自信にみなぎっている。
- ウ 空想の自分の姿に夢中になり感激している。
- エ 目が覚めそうなくらいの成績に驚いている。

(2) ——— ㉡ に入る語はどれですか。

- ア 飛び上がる
- イ ほほ笑み合う
- ウ あきれ返る
- エ 見上げる

(3) ——— ㉢ 「アツカンベーをした」ときの〈私〉の心情を説明しているものはどれですか。

- ア 授業中に空想する自分を戒めようとした。
- イ 勉強が苦手な自分をからかいたくなった。
- ウ みなの前で自分の体裁を取り繕うとした。
- エ 不運が続いている自分を励まそうとした。

(4) この詩を説明した次の文章について、あとの問いに答えなさい。

〈私〉は今、教室にいる。空想の中で「①の自分」に浸^{ひた}っていたら、先生から発せられた言葉に、思わず②へと引き戻^{もど}された。自分の点数は、いつもの通りぱっとしない五十五点。これが〈私〉の③。ひそかに胸に膨^{ふく}らんでいた期待は、まるで針でパンと穴を開けられた風船のように一瞬^{いっしゆん}でしぼんでしまった。

そんな〈私〉をよそに、〈おとなりさん〉はまたいつも通りの百点。

あの子に嫉妬^{しつと}する気もさらさらないし、自分と比べたところでも何にもならないけれど、この複雑な気持ちをどう表現しようか。

④ただ分かっていることは、たいして実力もないけれど、「⑤」だけは一人前にもっている自分が今ここに存在する、という⑥だ。

① ①・⑤に当てはまる語を漢字二字で答えなさい。ただし、対義語が入ります。

② 「⑥」に当てはまる語を詩中から一語で書きぬきなさい。

③ ④「ただ分かっていることはくだ」という作者の姿勢を表すものとして適切なものを二つ選びなさい。

ア 悲観的 イ 自虐的 ウ 生産的 エ 客観的 オ 攻撃的

③ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

鍵が開いているのに部屋から出ることができない——これは一つの④逆説だ。普通、「自由がない」というのは、牢獄のような閉じられた場所に入れられた状態だと私たちは考える。それに対して、部屋のドアが開いていけば、「自由がある」と思う。いつ、部屋から出て行ってもかまわないからだ。ところがこの話は、あまりにもたくさん選択肢があることが、逆に⑤牢獄だと感じられるということを示している。

フランソワーズ・ドルトという優秀な精神科医が、あるとき六、七才くらいの男の子を診察した。彼は、生後まもなく親に捨てられ、孤児院に預けられた。後に養子ももらいに来た夫婦に引き取られ「フレデリック」と名づけられたが、就学後も字を覚え、精神面・知能面の両方に大きな問題が見られた。ドルトは、診察中に彼が描く絵の中に「a」という字が書かれていることに気づき、「a」がイニシャルではないかと考えた。実は、孤児院では「アルマン」という名で呼ばれていたのだ。

ドルトが最初に呼んだ時は無反応だったが、あえてしゃがれ声や裏声でわざと視線を外して「アルマン」と呼ぶと、彼が劇的な反応を示した。ドルトは裏声で名前を呼びながら、次第に普通の声に戻し、最後「あなたはアルマンなんでしょ」と話しかけると、その瞬間、いきいきとした顔を見せたという。「裏声（オオフの声）」で話しかけたことで、フレデリックには、声はどこからともなく聞こえてくるように感じたのだろう。その後、彼の症状は急速に回復した。

なぜ、フレデリック少年に「アルマン」と呼びかけることで病気が治ってしまったのか。そして、それは何を意味しているのだろうか。

この話では、「アルマン」と「フレデリック」という二つの名前が登場している。しかし実は、⑥この話の中で名前と言えるのは「アルマン」だけで、「フレデリック」は名前に思えるが、名前ではない。それに気がつくことが重要だ。ど

ういうことか。

まず「アルマン」が名前なのは自明だ。孤児院に引き取られたときにつけられている。この子を「アルマン」と名づけたことで、「アルマンと名前のついた個人が、この世の中に存在している」とみんなが認めた。しかし養父母は、その子の名前をわざわざ「フレデリック」に付け替えた。なぜ、この養父母はアルマンという名前からフレデリックと名前を変えたのだろうか。

その理由はこう推測することができる。アルマンは親に捨てられた不幸な子だった。新しい養父母はその過去を断ち切った。これからは不幸な過去を断ち切つて、幸せな子になってほしい、あるいは、そういう不幸によって縛られていない、賢い子になってほしい。そういう気持ちを含めてフレデリックという名前をつけた。親としては、善意以外の何ものでもないが、そう考えて名づけたがゆえに、「フレデリック」は名前ではなくなってしまった。

「アルマン」という名前は、その子の存在につけられたものだった。将来、立派な大人になるかもしれないし、大悪党になるかもしれない。職人、学者、芸術家……、あらゆる可能性が開かれている。「いろいろな性質を持つかもしれないアルマンがいる」ということを示している。つまりこの「固有名」は、どのような性質を持つかわからないからこそ、すべてにおいて開かれていた。

ところが「フレデリック」という名前は、「アルマン」という名前を断ち切るためのものだ。「あなたのかわいそうな過去を捨てて生きてください」との意味が込められている。だから「フレデリック」と呼ぶ度に、「あなたは幸せな子として、賢い子として生きていきなさい」という意味がそこには含まれることになる。もちろんプラスの意味ではあるが、彼が幸せであろうか、賢いだろうか、馬鹿だろうか——そういうことを含んでいない「アルマン」とは違うものだ。

言い換えれば、「アルマン」はただ存在を認めた名前だったが、「フレデリック」は、ある特定の性質を指し示したため「概念」に近い。つまりこの子は、生まれてすぐに「アルマン」という名前をもらったが、「フレデリック」に変えられた瞬間、名前を失ったのだ。

ドルトは、⑦奪われた名前をもう一度彼に与えることで、彼自身を取り戻させ、問題を解決したのである。

さて、ここで「自由とは何なのか」、そして、なぜ私たちはたくさんの自由があるような世界に生きているはずなのに、息詰まるような感覚を覚えるのか、といった問題に戻りたい。その理由を今の例をヒントにしながら考えてみよう。

人間が「自由な主体」になるとはどういうことか。人間は放っておけば「自由な主体」になるわけではない。ではどうすれば、責任を持った「自由な主体」になることができるか。

ドルトの治療でいえば、まず、「自由な主体」を確立させるために「アルマン」と呼びかけた。「アルマン」と呼びかけることは、誰かがその人の存在を100%認めてあげることにはほかならない。一方、「フレデリック」は「存在」を認めるのではなく、その人が幸せで賢い人間である、という特定の在り方を示しているから、例えば⑤テストの点が悪いなど賢くなかったら、その存在は認められない。「名前」は、無条件でその人の「存在を認める」ものでなくてはならない。【中略】

そして、「存在」は「その存在を100%承認されると自由な主体に変化する」性質を持っている。その理由には、こんなからくりが働いている【図は省略】。まず、他人から認めてもらうということ。この存在の承認には、「他人」の存在がどうしても必要だ。このとき重要なのが、自分にとって自分の存在は選べるように与えられたものだが、他人はその人の存在を認めるか認めないかは、選ぶことができるということだ。馬鹿にしたり無視したりもできるが、あえて認めている。これがポイントだ。

なぜ人は、他人に認められたら「自由な主体」になるのか。それは他人が認めてくれたという、「私を認めてくれた他人の気持ち・眼差し」を内面化するからだ。そうすると、ただ与えられた自分という存在を、あたかも自分が自分で選んでいるかのような錯覚が生まれる。自分が自分の運命を選んだような気分、これが「人生を引き受ける」ということだ。こうして、ただ生まれたにすぎない自分が、「この人生を、責任を持った大人として生きよう」と思うとき、自分の存在を自分で決めた「自由な主体」に変身するのである。

さて、フレデリックとアルマンの話で、先ほどはあえて触れなかった話がある。それは「アルマン」と普通の声で話しかけたときに効果はなかったのに、なぜ裏声やしゃがれ声を使った「オフの声」だと効果があったのか、だ。

この説明は、とても難しい。ただ、すでに言ったとおり、「オフの声」はどこからともなく聞こえてくるような声だ。外から聞こえてくる声は、天から降ってくるような、まるで神の声のように聞こえる。つまり、この「他者」＝「神のよ

うなもの」に自分が認められることこそが重要なのだ。

「神のようなもの」とは、自分が尊敬し、信頼し、愛着を持っている人のことだ。全面的に信頼するような、自分よりも格の高い他者から、すべて認められているという感覚。この「神のようなもの」を担うのが、普通は親だ。もちろん親でなくてもいいし、親だけではない。だが、成長の最初の段階では、母親の占める割合が大きいだろう。母親、父親を100%信頼し、それに身を委ねるところからスタートする。やがて、父母以外の存在も、神のように感じるようになる。それは「世間」や「歴史」、または「人類そのもの」といった、観念的なものに変わっていく。

一般に、「自由」と言うとき、他人がいなければ一番自由だと思うだろう。他人がいると、相手のことを考えなければならぬから、勝手なことができない。あるいは他人が邪魔するかもしれないから、「自由は妨げられる」と考えられている。でも、今日の話は、そういう常識が間違っていることを示している。人間が

「自由な主体」になるためには、自分の存在を認める他人の眼差しが絶対に必要だからだ。「他人がいると自由がない」ではなく、「⑤」のだ。「自由」は、もともと他人を含み込んでいる。【中略】

「自由」とは「責任」を担うことだ。英語で責任はレスポンスビリティ（responsibility）と言う。レスポンスビリティとはレスポンス（応答する、応える）ができるということ、つまり「責任」とは、応答できることをいう。では誰に応えるのか。「神のような存在」が私に呼びかけ、その呼びかけに応じる。それが、責任を持つということの意味なのだ。

では、最初の問いに戻ろう。我々の社会にはあふれるほど選択肢があるのに、なぜ不自由に感じるのか。それは例えばこんな感覚だと思う。目の前には選択肢がいくらかもある。インターネットで情報が得られ、「好きな人生を歩んでもいいよ」と言われ、山ほどの選択肢がある。欲しいもの、買いたいものもたくさんある。そして、「この中からどれか選びなさい」と言われる。だけど、好きなものが何かわからないし、どれを選べばいいのかわからない。これはどうしてなのかというと、現代社会の中で「神のようなもの」がなんらかの理由で弱体化してしまっているからだと考えられる。そのため自由になれない。

（『生き抜く力を身につける（中学生からの大学講義）』
ちくまプリマー新書より 大澤真幸「自由の条件」）

(1) ———— ① 「逆説」の意味はどれですか。

ア 真相を伝えるのにあえて矛盾むじゆんさせたもの。

イ 明らかに間違いを含んだ説明をするもの。

ウ 一見間違っているようで真理を表すもの。

エ 条件と結果との間に食い違いがあるもの。

(2) ———— ② 「牢獄」は、本文においてどのような意味で用いられていますか。言い換えている表現を本文中から三字で書きぬきなさい。

(3) ———— ③ 「この話の中で〴〵名前ではない」と分析する理由はどれですか。

ア 「フレデリック」は、実の父母との辛い過去を断ち切るために、養父母がつけたものだから。

イ 「フレデリック」には、これから幸せな人間になつてほしいという強い願いが含まれるから。

ウ 「アルマン」は、周囲のみんなが彼の存在を認め、特定の在り方を含む概念的なものだから。

エ 「アルマン」は、彼が善人になろうが悪人になろうが関係なく、彼の存在についてのものだから。

(4) ———— ④ 「奪われた名前をもう一度彼に与える」というドルトの行為は、言い換えるるとどのような行為と同じだと言えますか。「〴〵行為」につながるように、本文中から十七字で探し、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

(5) ———— ⑤ 「テストの点が悪いなど賢くなかったら、その存在は認められない」を説明するものとして、最も適切なものはどれですか。

ア 試験の点数が悪くても存在することが許されるのは、アルマンという人間だけである。

イ 賢いという条件が付帯するため、条件を満たしていないとアルマンにはなりえない。

ウ フレデリックとしてあるべき姿を満たしていない場合は、フレデリックと認められない。

エ 賢くないのは不幸なことなので、幸せを願われているフレデリックには不適切である。

(6)

⑥

 に当てはまるのはどれですか。

ア 他人がいてこそ自由を失うのである

イ 他人がいないなら人間は自由である

ウ 他人がいるから人間は自由にならない

エ 他人がいなければ人間は自由ではない

(7) 次の説明は、本文の要点をまとめたものです。空欄「Ⅰ」～「Ⅳ」に当てはまる適語を本文中から漢字二字で書きぬきなさい。

自分はこれから存在しよう、という強い意志をもって生まれてきた人間がいるだろうか。誰もが誰かに生んでもらってこの世に存在している。つまり、人間の「存在」とは、誰にとっても否応なしに与えられたものにすぎない。そんな我々が「自由な主体」を確立するためには、いくつかのステップをふむ必要がある。

まずは、「Ⅰ」だ。「Ⅰ」とは、自分の存在を無条件に認めるものである。我々は生まれてすぐ「Ⅰ」によって全幅の「Ⅱ」をよせた身近な他者から、存在の「Ⅲ」を得る。フレデリック少年の場合、「Ⅲ」を得てすぐ養父母の善意によってそれが奪われ、成長が阻まれてしまったと考えられる。そして、年を重ねるにつれて「他者」の範囲が次第に広くなり、やがてただ与えられたにすぎなかった自分の運命が、まるで自分の「Ⅳ」において選り出したかのように意識が変わってゆく。ここで初めて「自由な主体」が顔を出すのである。

見方を変えると、「自由な主体」を確立するために、我々は他者からの「Ⅲ」欲求を潜在的に抱いているということになる。

我々は「自由になりたい」「自由が欲しい」と思うことがあるが、本当の意味で実現したいのならば、見えざる声に応答し、自分の「Ⅳ」を果たしていく必要があるのである。

(8) この文章の内容と一致するものを二つ選びなさい。

- ア ただ与えられたこの自分の存在を認めるか認めないかは、他人が判断することである。
- イ 多くの選択肢の中から自由意志で選択できないのは、自分に責任感がないためである。
- ウ 自分より格の高い他人がいるだけで、我々はそれを内面化し、自由な主体を得られる。
- エ 他人からどう見られるかばかりを気にすると、その人は自由ではないということになる。
- オ 絶対的に尊敬できる存在に出会い、身を委ねることが、自由な主体を得る第一歩である。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

人は、いつ、ことばに出会うのだろう。

お母さんのおなかの中であることは間違いない。

では、その、いつ？

お母さんのおなかの中であることは間違いない、と私が確信しているのは、我が家の息子が、胎内で聞いたことばを覚えていたからである。

息子が二歳のある日、私たちは、ちゃぶ台の前にいた。

私は新聞を読み、息子は、私のトレーナーの裾を広げて、頭から入り込み、ご満悦だった。

寒い日だった。そのころの彼は、私の着ているものの中に入るのが大好きだったのだ。手が冷たいときは、上着の裾から潜り込んで、おっぱいで温めるのが、彼の常とう手段。その日も、そんなシーンだったのだと思う。私は、部屋が暖まるのを待ちながら、新聞を広げていた。

そうしたらふと、トレーナーの中の彼が、「ママ、ゆうちゃん、ここにいたんだよね」とつぶやいたのだ。

彼が、かつて私のおなかの中にいたこと。たぶん、私自身が教えたのか、他の大人が教えたのだろう。なので特段気にせず、「そうよ」と^①生返事をしながら、私は新聞を読み進めていた。しかし、^②彼の次のことばが私の手を止めさせた。「ママは、あかちゃんがんばってって、ゆった」

あかちゃん、がんばって。

このことばを言った期間は、明確だった。息子が生まれる三週間前まで、私は働いていた。最後の日も深夜残業していたくらいである。とはいえ、臨月に入るところからは、急におなか張ることがあり、ここで出産はまずいと思った私は、おなかをさすって「あかちゃん、がんばって」と呪文のようにお願いしたのだ。

したがって、このセリフは、息子が生まれる五週間前から三週間前まで、長くとも二週間しか口にしなかったことばだったのだ。生まれてからは、この子を赤ちゃんと呼んだことはない。

私はその瞬間、彼が胎内記憶を語っているのだと確信した。そこで、私は、ずっと誰かに聞きたかったことを、息子に聞いてみることにしたのである。

その質問はなぜか、一回しかできないと直感した。一度引き出すのに失敗したら、その記憶はばらばらになって、記憶の海の底に沈んでしまいうちにちがいない……私は、慎重に彼と呼吸を合わせた。

「ゆうちゃんは、ママのおなかの中にいたんだよね」「うん」

ここまで慎重を期しながらも、私は、彼の答えを期待していなかった。しかし、彼は教えてくれたのだった。

「ママ、忘れちゃったの？」と、彼は、いぶかしげな顔でトレーナーの中から出てきた。

「ゆうちゃん、木の上に咲いてたじゃない。で、ママと目が合つて、それでもって、ここにきたんだよ」と言いながら。

まるで美しい詩のようだった。

幼児が語る胎内記憶には、共通の特徴があると言われている。高いところにて（お空、雲の上、屋根の上など）、母親を見ていたということ。母親を選んでここに来たということ。息子の語った胎内記憶も、これに準じていた。

息子が、木の上に咲いていた、とは、私も思っていない。おそらく、最初の記憶が始まった、その瞬間のイメージが、彼の語彙の中では「木の上に咲いていた」に一番近かったのだろう。注目すべきは、彼や、胎内記憶を語る多くの子どもたちが、母を「選んできた」と確信していることだ。

卵子に幸運な精子がたどり着き、受精卵になる。受精卵が無事子宮壁に着床して、細胞分裂が進む。六週目には、後に脳と脊髄になる神経管のチューブができあがる。そんな生命の最初の歩みには、個人差はほとんどない。その歩みのどこで、脳は最初の「意識」を生み出すのだろうか。いずれにせよ、個人差のほとんどない領域で起こることだ。

その「意識」の初めに、母を選んだ確信がある。多くの胎内記憶を語る子に。ということは、おそらくすべての赤ちゃんに。実際に選んだかどうかは別にして母を選んだということは、人生を選んだということだ。◎人生は、「能動的な確信」と共に始まるのである。そのことが、どうしようもなく、私を泣かせた。

私は語感の正体が体感であることを知るまでは、胎児がことばを知るの

㊦ からだと思っていた。つまり聴覚野が完成してから、ヒトはことばに出会うのだ、と。

胎児の聴覚野は、ほぼ三〇週目に完成するという。つまり、妊娠七か月目の後半には、外部音声を感知して、記憶の領域にしまうことが可能になる。我が家の息子のように、妊娠終盤の母親のセリフをそこから持ち出すことも、もちろん奇跡じゃなく、普通に可能なのだ。

㊧、ことばの真髄が「筋肉のゆらぎ」「息の流れ」「音響振動」などの体感に由来するとしたら、それはもつと、驚くほど早い時期に起こることになる。なぜならば、母親がことばを発するとき、おなかの中にいる赤ちゃんは、母体の筋肉運動、息の音や声帯振動の音響のど真ん中にいるからだ。

想像してみてもほしい。母親のおなかの、羊水の中に浮かんでいる自分を。安寧に浮かんでいたかと思つたら、横隔膜が勢いよく上下し、腹筋が緊張して、縮んだり張ったりする。声が腹腔に共鳴して、細かい振動が起こる。――つまり、天井が上下し、壁が膨張・収縮を繰り返し、絶えず細かい振動が起こるのである。大地震に、雷を加えたような、そんな変化に気づかないわけがない。

神経がわずかでもできてくれば、揺れていることはわかる。妊娠のとてつもなく早い時期から、胎児は、「ことばに伴う物理現象」を感知しているのである。

【中略】

語感とは、発音体感もたらす脳のイメージであり、ことばの感性の核となるものだ。その体感とは、最初に、母の胎内で、母の発音体感に同調するようにして獲得するのである。母親の血流と、筋肉の動きの「ゆりかご」の中で。口伝てならぬ、命伝てで。

㊧ならば、ことばとは、命のすべてを使って授けてもらうもの。まさに命の

㊧である。

*安寧：おだやかで不安などがなく、そのさま

*横隔膜：胸部と腹部の間にある筋肉性の膜

*腹腔：横隔膜の下部で腹部の内部

(黒川伊保子『ことばのトリセツ』集英社インターナショナル新書)

(1) ———— ㉠ 「生返事」の意味はどれですか。

ア 弱々しい返事

イ はっきりした返事

ウ いい加減な返事

エ 白々しい返事

(2) ———— ㉡ 「彼の次のことばが私の手を止めさせた」のはなぜですか。「くから」に続くように本文中から十九字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(3) ———— ㉢ 「人生は、「能動的な確信」と共に始まるのである」とは、どういうことですか。

ア 生まれてきた多くの赤ちゃんは、自分が生まれてくる時に自分の意思で生まれてきたということ。

イ 胎児たちの母親は、自分の子どもが自分を選んで生まれてきてくれたと信じているということ。

ウ 胎児は、自分の生まれてきた状況を覚えているほど、胎内の意識がはっきりしているということ。

エ 生まれてくる赤ちゃんは、自分が母を選んだという意識が少なからず存在しているということ。

(4) ㉣ に入る体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

(5) ㉤ に入る語はどれですか。

ア しかし イ つまり ウ また エ なぜなら オ あるいは

(6) ㉦ に入る語はどれですか。

ア 養生ようじやう イ 転生 ウ 転写 エ 映写

(7) 本文の内容に合あわあないものを答えなさい。

ア ことばとは、胎内で感じることができるものであり、母親の発音体感に伴って得られる。

イ 受精卵から細胞分裂していく生命の最初の過程は、基本的に全員同じように行われている。

ウ 赤ちゃんは胎内で聴覚野が完成してから、外部音声を拾って記憶することは可能である。

エ 聴覚野が完成する以前に獲得された体感や語感が、胎内記憶として脳に記録されている。

五 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

幼いころに父を亡くした輝（ひかり）はもうすぐ小学六年生になる。毎朝登校するときに母親と手をふり合うのが日課になっているが、その様子を同級生に見られてからかわれてしまう。同じく父を亡くした同級生の香帆（かほ）は「おかしいなんて思わない」と理解してくれたが、転校してしまった。輝は、そろそろ手をふり合うのをやめたいと思うが、母が傷つかないかで悩んでいる。

「輝、遅刻するよー、早くしな〜」

「はーい」

結局、お母さんにはなにも言えずに、今日も家を出てきてしまった。

ぼくは、お母さんに言う言葉をいくつも考えていた。

（もう、見送りはしなくていいよ）

はつきり言いすぎるのは、よくないだろうか。

（ぼくって、四月からは六年生だよな）

（ぼく、マザコンで言われたんだよ。それに、ぼくとお母さんはロミオとジュリエットみたいだって）

（ぼく、正直に話してみようか。クラスみんなにからかわれたことを、正直に話してみようか。それに、ぼくとお母さんはロミオとジュリエットみたいだって）

はあーと、ため息をつく。

ぐずぐず悩んでいるあいだに、三学期はもうすぐおわりうとしていた。

〈ぼく〉は〈おじいちゃん〉の畑仕事を手伝ったあと、おそろおそろ相談してみる。

二人でベンチに腰かけて、おじいちゃんに話しはじめた。

学校でからかわれたこと。お母さんにやめたいと言えずに悩んでいることを打ち明けた。おじいちゃんはあごに手をあてて考えこんだ。おじいちゃんの手は土でよごれていて、指先は茶色くそまつている。

「輝はあまえん坊だったからなあ。千明さんも、大変だっただろうなあ」

ぼくは顔を赤くした。

自分でも、それはわかってる。

千明さんというのは、お母さんのことだ。お母さんのことを下の名前で呼ばれるのは、とたんに変な感じがする。

「おれは、やめなくてもいいと思うな」

おじいちゃんが言った。

「いいじゃないか。ぜんぜん、おかしくなんかないぞ。まわりの言葉や目を気にして、好きなことをやめる必要はないんだ。輝とお母さんの、大事な時間だろう」

「うん」

① ぼくはあいまいにうなずいた。

香帆も、同じように言ってくれたんだ。

「他人のいじわるな言葉になんか、耳をかたむけなくてもいいんだ。なっ、輝」

「うん」

うつむいたぼくの顔を、おじいちゃんはそつとのぞきこむ。

ぼくは、自分の気持ちをどう言い表したらいいのかわからなくて、頭の中で必死に言葉を探した。

他人の言葉は気にしなくていいと、おじいちゃんは言う。そのとおりだとぼくも思う。

「ただ、違うんだ。たしかに、きつかけはみんなにからかわれたことだったかもしれない。みんなに笑われて、はずかしい思いをした。だけど。」

「そうじゃないんだ。まわりに言われたからじゃないんだ。ぼくは自分の意志で、やめたいんだ」

そうだ。これはぼくの意志なんだ。ほかのだれでもない、ぼく自身の。

「みんなに笑われたのはショックだったよ。でもなんていうか、ぼく自身がこういうのはおかしいんじゃないかって、思うようになったんだ。おかしいっていう

のとは、違うかもしれない。その、なんていうか。いやだとか、はずかしいとかじゃなくて、今のぼくには、なんか違うっていうか」

サイズの合わない服を着ていて、気持ちよく体を動かせないような違和感。なんだらう、この気持ち。自分でもよくわからなくて、もやもやするんだ。

「でもさ、お母さんを傷つけたらどうしようって、心配なんだよね」
だつて朝の見送りは、ぼくたちの大事な時間だから。

「でも、やめる」

ぼくが言いきると、おじいちゃんは⑧おむろに立ちあがった。腕を組みながら、塀の向こうの桜の木を見あげる。長くのびた枝が敷地にかかり、毎年桜の花をながめることができるのだ。

枝のところどころには、ぶくつとふくらんだつぼみがならんでいる。薄紅色のつぼみは、春をとじこめたまま開く日をじっと待っている。

「なつかしいなあ」

おじいちゃんが見みじみとつぶやいた。

おじいちゃんの視線の先を追うと、その目は桜の枝のずっと向こう。うすい雲がとけた空を見ている。

「おじいちゃん、なにがなつかしいの？」

「ん、ああ、すまん」

おじいちゃんははてれたように笑った。

「渉のことを、思い出したんだよ」

渉。お父さんの名前だ。

「えっ、なんでなんで？ どうしてお父さんのこと思い出すの？」

ぼくは興奮して、おじいちゃんのそでを引いた。お父さんの話を聞くと、ぼくはいつも気持ちが高ぶってしまうんだ。

「あのときの渉も、今の輝と同じくらいの年だったな」

おじいちゃんは再びベンチに腰をおろすと、お父さんの思い出話をしてくれた。

それは、体操着袋にまつわる話だった。

お父さんが小学生のころ、体操着袋はお母さん、つまりぼくのおばあちゃんが手づくりでつくっていた。

お裁縫が得意なおばあちゃんは、学期が変わるたびに、お父さんの体操着袋をつくるのを、楽しみにしていたのだという。

「WATARU」と、アップリケをつけたりパッチワークにしたり、ずいぶん手のこんだものをつくっていた。

だけどある日、お父さんはおばあちゃんに宣言した。

「もう手づくりしないでいいよ。自分で選んだのを買ってくるから」
そう言つて、お父さんは紺色の無地の袋を、自分のおこづかいで買ってきてしまった。

「おばあちゃん、ショック受けてた？」
「ああ、さみしそうにしてた」

「そうだよな。」

息子のためにやっていたことを、突然、もういいって言われたんだもんな。

ぼくのお母さんは仕事でいそがしいし不器用だから、手づくりでなにかをつくってくれたことはない。ぼくは手づくりの体操着袋をうらやましく思った。

でも、お父さんはお父さんで、なにか思うところがあつたんだろう。ぼくみたに、クラスメイトにからかわれたのかもしれない。

それとも、アップリケのついた袋になにか違和感があつたのだろうか。ただ反抗したかっただけ、ということも考えられる。

お父さんに聞いてみたい。
心の底からそう思った。

お父さんなら、⑨今のぼくの気持ちもわかってくれるんじゃないだろうか。
「あのときの渉は、輝と同じ気持ちだったのかもしれないな」

おじいちゃんはやさしく笑い、その目にしっかりと映しこむようにぼくを見た。なつかしい人を見つけたみたいに、目を細める。

おじいちゃんは、ぼくを見ながらぼくの中にお父さんを見ている。それがわかつて、うれしいような、むずがゆいような気持ちになった。

「それに、渉はこんなことも言つてたんだ」

「なんて言つたの？」

⑩胸がふるえる。

「お母さんには悪いけど、大人になるんだ」ってな」
おじいちゃんの言葉が、午後の光の中にとけていく。

「どうだ、生意気なこと言うだろう？」
おじいちゃんはずれしように笑った。

うん、ほんとに生意気だと思った。
だって、ぼくたちはまだ小学生で、大人がいなくなてなにができるだろう。
それでも、大人になる。
ぼくは大人になるんだ。

終業式の日がやってきた。

明日からはじまる春休みに、ぼくの心はすでに浮き立っている。

お父さん、いってきます。

*お鈴を鳴らして、手を合わせる。

写真のお父さんへそつと目配せをして、「よしっ」と気合を入れて立ちあがった。

台所のお母さんのほうへ向かう。

「お母さん」

「なに？」

流しで手を洗いながら、お母さんが顔をあげる。

「あのさ。いつもベランダで見送ってくれるじゃん。今日で最後にしようと思うんだ」

ぼくは昨日から決めていた言葉を言う。

「ぼくさ、四月からは六年生だし、お母さんだって朝はいそがしいだろ。毎朝見送ってもらえてうれしかったけど、今日でおしまいにする」

お母さんはきゅつと、蛇口の水をとめた。

「そつ、わかったわ。今日でおしまいね」

あつさりとした口調だ。

「ほら、もう出る時間だよ」

そう言つてぼくをせかす。

ぼくは拍子ぬけしてお母さんの顔を見つめた。

てつきり、なんで？ とか聞かれると思って、いくつも言葉を用意していたのに。

お母さんが傷ついたらどうしようって心配していたけど、お母さんの顔はなんていうか、とても晴れ晴れとしている。

今日でおしまい。

自分で言った言葉を心の中でくり返してみる。

さみしく思っているのは、どうやらぼくのほうみたいだ。

「ほら、いったいいった」

お母さんに手で追いはられる。

「いってらっしゃい」

「うん……、いってきます」

ドアを開けると、鼻先に風がふれた。つんとさすような冬の風ではなく、やさしく鼻の上をすべっていく春の風だ。

階段をかけおりて外に飛び出す。

団地のわきに立ちならんでいる桜の木は、ぼつぼつと花が開きはじめている。

見あげると、枝と枝のあいだから、水色の空がのぞいている。

ぼくはふと思った。空から見る桜の花は、どんなふうに見えるだろう。

春休みのあいだに、ぼくはゆつくり時間をかけて手紙を書こうと思っている。

香帆へ、送る手紙だ。

いつかの、香帆との会話を思い出す。お父さんに、また会えるだろうかと話したときのことだ。

お父さんに会えるかどうかは、正直なところ今でもわからない。

でも、香帆に伝えるんだ。きっと、ぼくたちは大丈夫だって。

それから、手紙には楽しいことをいっぱい書こう。学校のこと、あいかわらずのクラスメイトのこと。

香帆も、ぼくに楽しいことをいっぱい書いてくれるだろう。

いつものように、団地を見あげた。

ベランダに、お母さんが立っている。

「おーい、いってらっしゃーい」

身をのり出して、大きく手をふってくる。しかも、かなり大きな声だ。まるで一年生のときに戻ったみたいだ。

はずかしいのとなつかしきで、ぼくの胸はいっぱいになった。

お母さんはさらに身をのり出して、手をふっている。

その姿を目に焼きつけて、

「いってきまーす」

大きく手をふり返した。

*お鈴…ふちをたたいて鳴らす仏具

(1) ——— ㉠ 「ぼくはあいまいにうなずいた」のはなぜですか。

ア 同級生にからかわれたことが直接的な理由ではないが、自分の気持ちを言いあらわす適切な言葉が分からなかったから。
イ お母さんが下の名前で呼ばれたことや、自分があまえん坊だったと言われたことが恥はずかしく照れくさかったから。
ウ 友達にからかわれても大事な時間は優先するべきだ、というおじいちゃんからのアドバイスが見当外れだったから。
エ 不明瞭ふめいりょうではつきりとしなかつた気持ちを整理すると、見送りをやめてほしいのは自分の意志ではないと気づいたから。

(2) ——— ㉡ 「おもむろに」の意味はどれですか。

ア 突然に
イ おどろいて
ウ ゆっくりと
エ 元気よく

(3) ——— ㉢ 「今のぼくの気持ち」を例えた表現を一文で本文中から探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(4) ——— ㉣ 「胸がふるえる」とありますが、このときの〈ぼく〉の気持ちを答えなさい。

ア おじいちゃんが予想もつかないことを言ったので緊張している。
イ おばあちゃんがシヨックを感じていたことに心を痛めている。
ウ お父さんに似ていると言われたことに戸惑いながら照れている。
エ お父さんのことをさらに知りたいと気持ちが高ぶっている。

(5) 次の文章は、〈輝〉の視点から今回の出来事をまとめたものです。あとの問いに答えなさい。

ぼくは、お母さんとの「大事な時間」についての悩みをおじいちゃんに打ち明けた。⑤おじいちゃんはいつもぼくのことを心配してくれる。子どもの気持ちに寄り添ってくれるんだ。すると、おじいちゃんの口から「⑥渉」という名前が出てきた。どうやらお父さんにも同じような出来事があったらしい。そのエピソードを聞いて、ぼくは幾分心が軽くなったような気がした。

終業式の朝、ぼくはお母さんに向けて「卒業宣言」をした。今考えてみれば、あの宣言はお母さんに向けたものというよりも、むしろ⑦まだ追いついていないぼく自身の気持ちを整理するためのものだったのかもしれない。

① ——— ⑤ 「おじいちゃんはいつもぼくのことを心配してくれる」とありますが、〈おじいちゃん〉が〈ぼく〉とのやりとりの中で、孫を心配している様子が分かる一文を本文中から探し、はじめの四字を書きぬきなさい。

② ——— ⑥ 「渉」は〈ぼく〉の亡くなった〈お父さん〉のことですが、本文中には遠回しに別の表現で書かれているところが一カ所あります。五字以上十字以内で書きぬきなさい。

③ ——— ⑦ 「まだ追いついていないぼく自身の気持ちを整理する」とありますが、その過程が分かる一文を本文中から探し、はじめの四字を書きぬきなさい。

(6) この物語において、〈お父さん〉の体操着袋にまつわるエピソードは、〈ぼく〉にとつてどのようなきっかけになったと考えられますか。〈お母さん〉との関わりに着目して、四十字以上五十字以内で「〜きっかけ」につづくようにまとめなさい。

(7) この物語の特徴としてふさわしいものを答えなさい。

ア 反抗期を迎える〈ぼく〉と子離れできない母親との関係性がテーマになっていて、母子のすれ違いを印象づける結末になっている。

イ 登場人物の行動が客観的な視点から描かれていて、主人公の〈ぼく〉の心情の変化は巧みな情景描写によって表現されている。

ウ 父親を失った悲しさから家族が立ち直るまでの状況が描き出され、互いの悲しみを思いやる優しさを読み取ることができる。

エ 思春期を迎えた少年の葛藤する気持ちに理解を示すおじいちゃんと、〈ぼく〉が母親との距離感に思い悩む様子が描かれている。